

サービスラーニングを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科 2年 長谷川 皓己

活動先：NPO 法人 地域福祉サポートちた

クラス：野尻 紀恵 先生

1.自分の成長と気づき

私はサービスラーニングで、NPO の活動に関わりながら地域福祉学習に取り組んだ。正味な話、サービスラーニングを選んだ時、私は NPO の存在意義や NPO が取り組むそれぞれの目的は全く理解できていなかった。しかし、NPO の活動や目的を知ることができた NPO バスツアーや、NPO での 6 日間以上の地域貢献活動、そして活動前の事前学習や活動後のふりかえりを経て、地域におけるそれぞれの NPO が果たす役割を確認することができた。そして同時に、私の地域福祉に対するイメージが変化していった。

上述した通り、地域福祉に対するイメージが変化した理由、要因が数点ある。まず、NPO バスツアーが私の NPO に対する印象を大きく変えた。バスツアーでまわった NPO はそれぞれ違う目的で活動していた。高齢者のためや障害者のためなど、同じ NPO でも種別が全く違う。この時点で地域における NPO が果たす役割はそれぞれが別物だということを漠然とだが、理解することができた。

次に、貢献活動の事前学習や活動先の職員との顔合わせが待っていた。私はその時、地域福祉のことや貢献活動に対して受け身になっており、NPO に対しても、地域福祉の学習に対しても疎かになっていた。そのように浮ついている状態で、活動先である地域福祉サポートちたの職員との顔合わせに行ってしまう、職員からお叱りを受けてしまった。サービスラーニングのカリキュラムは何だと問われても、答えることができなかった。また、サポートちたの活動理念や活動内容に関しても問われたが、同じく答えることができなかった。私は、現場で働いている人と実際に話してみても、自分はまだ NPO とサービスラーニングのことを理解できていないということ、及び、NPO の職員は他の職業者とは比較にならないほど、地域福祉に対して強い意欲、明確な目的をもっているということに気づかされた。私は活動までに、可能な限り事前学習を行った。

そして、地域福祉サポートちたでの活動が始まる。まず、自分たちで考え、サポートちたで何をするのかという活動計画を立てることになった。活動計画を立てるには必ず目標、目的を作らなければならないと考えられる。活動をしていてもその本質が空白では、意味がないものになってしまうからだ。そして何より自己満足なものにしてはいけない。例えばお客を呼んで活動するものなのであれば、第一に彼らに楽しんでもらうことに集中するべきだと思われる。計画を立案中、ひとつの施設でイベントを行うためには、実行力や責任感が必要だと感じることができたのである。企画は、大道芸サークルに入っているメンバーの能力を活かし、バルーンアートを来てもらったお客へ披露するという事になった。

更に、サポートちたの **Ada-coda** というワンデイシェフができる空間を使い、自分たちが考案したメニューを出品することも追加された。企画自体は考案メニューを食してもらい、頃合いを見てバルーンアートの企画をするという、その名もパフォーマーズカフェをすることになった。その企画を行うに当たって広報を事前にしなければいけなかったのだが、チラシを作る作業が遅れてしまい、企画の直前に行くことになってしまったのだ。この時、集客の難しさやそれに対する責任を感じた。

広報は、さまざまな NPO や福祉施設、市民活動センターで行った。その時、同時に見学もさせてもらい、バスツアーで学んだ NPO が果たす役割はそれぞれが別物だということを見直した。幸いサポートちたが中間支援組織という立場のおかげもあってか、十分な集客数を稼ぐことができた。また広報中に、施設で知り合った人達が、パフォーマーズカフェで手品を披露してくれることになり、企画がより充実したものとなった。この時私は、企画を計画する者も、来てくれるお客も、企画を援助してくれる職員も、皆が皆その地域に住まう市民だということが分かった。同時に NPO などで行う活動には、市民性が不可欠なものだということも分かった。市民同士の育ち合いや地域の繋がりというものを経験できた。そしてその企画は、市民が集まり、協働できるような居場所にもなるのだと理解することができた。

2. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

市民性や中間支援組織は、研究課題にもなった。中間支援組織は、行政と NPO、NPO と NPO、NPO と人、様々な人やモノ、情報を繋ぐ役目を担っている。このように市民性というものは、協働によって生まれる。可能であれば、ここに企業のセクターが介入することが理想である。行政、NPO、企業の3つのセクターが相互に協力しあえば、災害など十分でない福祉体制に対応することができるのだ。NPO は、阪神淡路大震災後に生まれたものである。しかしその時は、企業の直接的な支援も薄く、行政も細部まで支援をすることができなかったためか、NPO となった当時のボランティアによる依存が大きかった。サポートちたのような繋ぐ役割をもった中間支援組織の存在が、現代の安定していない福祉体制や災害支援に必要なのである。

私は自分たちで企画することの大変さや集客の難しさなど、さまざまなことを学んだ。そしてその経験を大切に、更なる学習のために、サポートちたのワンデイシェフで活動しているグループに、普段どのような運営を行っているのかなどといった質問をした。平均2、3人で、自分の料理を振舞って受け入れられるか知りたいから、料理に関心があったから、仲の良いグループで楽しい時間が作りたかったからなどというそれぞれの目的を持って運営しているらしい。そして私は「Ada-coda は市民の居場所づくりとして機能しているかと思いませんか？」という質問をした。していると答えた人は、「市民の居場所となる」、「交流ができる」という理由があった。一方していないと答えた人は、「毎日やっていない」、「知らない人がたくさんいる」、「場所が目立たない」という理由を述べていた。居場所づ

くりや繋げる役割を率先しているサポートちたでさえ、このような問題がある。地域にあるニーズにどう応えていくのが課題となってくるのではないだろうか。

3.まとめ

サービスラーニングでは、市民社会における市民性、地域にあるさまざまなニーズ、NPOが果たすそれぞれの役割、そして何より、そのNPOを支援する中間支援組織の存在意義などを知ることができた。活動報告会で得た他のNPOの情報なども活かし、今後のNPOの活動や地域における福祉事業を、どうすれば円滑に進めていくことができるのか考えていきたい。